

君は奴の  
所有物じゃない

たなかひまわり

実夏は僕を嫌っている。

僕はカラス。実夏のアパートの前の、背の高い木に住んでいる。

実夏が僕を嫌っている理由.....

それは、実夏が今付き合ってる彼、裕二に僕が似ているから。

もちろん、見た目じゃなくて性格のこと。

僕はいつも実夏の部屋からやや見上げたところにいる。

だから時々実夏と目が合って、そのつど実夏に睨まれる。

僕もひとりぼっちで実夏も一人暮らしだから、同じ境遇で仲間だと思いたいのに。

実夏はそうは思ってくれない。

僕がどんなに切なげに鳴いても、実夏の耳にその想いは届かない。

ひとりは淋しいね.....。

そう呟いているのに、実夏はわかってくれない。

実夏は実夏でひとりきり、裕二のいない時間に耐えている。

だから僕は反論する。

実夏は僕の事を誤解している。

僕は裕二みたいに気紛れじゃないし、人の心をもてあそんだりしない。

そりゃ、仲間のカラスの中には人にちょっかいだして喜んでいる奴もいるけど、僕はそんなこ

とはしない。

だけど実夏は僕を見るたび裕二を思い出す。

裕二の事で空回りしている自分が嫌になる。

とんだ濡れ衣だ。

辛いのなら別ればいいのか。

.....そんな単純にはいかないか。

いいよ。実夏が僕の事をどう誤解しようと僕は実夏の味方。

僕はいつでも実夏の事を見守っている。

木の上から。いつでも.....

大学生の実夏は授業とバイトを終えて、くたくたになりながら家に帰ってきた。

カーテンを閉めないなので、僕から実夏の様子がはっきりとわかる。

「ただいまーっと」

誰もいない部屋に向かって疲れた声を出す。

そしてテーブルの上の書きかけのレポート用紙を見て、大きくため息をついた。

「明日レポート提出日だっけ。参ったなあ、もう頭働かない」

疲れと眠さで半分もうろうとしながら独り言を言っている。

パジャマに着替え缶ビールを手にとると、実夏は床にへたり込んだ。

ビールを一口飲んだだけなのに、ぼわんとした顔になる。

「このまま寝ちゃおうかな……でも、明日レポート出さないと単位もらえないよね……だけど、こんな頭で何が書けるっていうのよ……留年なんて嫌だからね……留年？……絶対、やだあ……」

ほんの少しだけ残っている意識の中で、実夏は自問自答している。

でも考えているだけでちっともレポートに手をつけようとしなない。

目を閉じて首をうな垂れたかと思うと反射的に目覚める。

そしてまたうつらうつらしてふっと起きる。

実夏がぐっすり眠ってしまうのも時間の問題だ。

それを何度か繰り返した後。

実夏は電話のメッセージランプが点滅していることに気が付いた。

「あっ、留守電が入ってる」

一瞬にして実夏の意識がはっきりした。

「おまえ、タバコ止めろよ」

裕二が実夏に掛けた最初の言葉だった。

「えっ？」

突然だったのと緊張で、実夏は何を言われたのかわからなかった。

実夏が大学三年になったばかりの春のことだ。

テニスサークルの新人歓迎会で実夏と裕二は隣同士に座った。

裕二はサークルのOBだ。

「女の子はタバコを吸わない方がいいよ、体にも悪いし。それにおまえにタバコは似合わない。いい女ならともかくね」

裕二はウイスキーのロックを飲みながらそう言って笑った。

初めて話をする相手に、なんて失礼な事を言うんだらう。

実夏は最後の言葉にむっとした。

実夏がタバコを吸い始めたのは、高校の時に付き合っていた彼との別れがきっかけだった。

実夏は彼の言いなりだった。

彼が白が好きと言えば白いブラウスを着た。

彼が髪の毛の長い女の子が好きと言えば、ひたすら髪を伸ばした。

彼に好かれたい一心だった。

その結果、つまらない女として飽きられた。

タバコを吸う事で、彼という呪縛から逃れようと思った。

それが何の気休めにもならないとわかっていながら手放せなくなっていた。

「すごく無理して吸ってる感じ。吸うんだったらもっとうまそうに吸ってよ」

「うまそうに……ってどうやってやるんですか？」

むっとしたまま実夏は訊いた。

「勉強とか仕事の後に、ほっとしたい時ってあるだろ？ そういう時に吸うと実際うまいと思うんだよ。ほんとにうまいって思って吸ってれば、自然とそういう顔になる」

「はあ……」

「ただカッコだけつけて吸おうと思ったって全然様にならない。そう思わん？」

よくわかりません……。

実夏は心の中で返事した。

「だからタバコが一息つく道具ではないんだったら、害になるだけだからやめた方がいいんだよ」

これで「失恋の痛手を癒すためにタバコを吸ってます」なんていうことがわかったら、何を言われるかわからない。

「そうですね。食事もおいしくなくなりますよね」

実夏は適当に相槌を打って、愛想笑いをしながら話を流した。

歓迎会では最後まで、お互いに好意を持つような雰囲気にはならなかった。

だが裕二はこの日以来、何かにかこつけて実夏を誘うようになった。

「海、見に行こうよ」

「海？」

「うん、江ノ島あたり行かない？島の裏手に洞窟があるんだよ」

「連れてってくれるんですか？」

「そうだよ。だから誘ってるんじゃない」

最初はなぜ裕二が自分を誘うのか実夏にはわからなかった。

からかっているのかなと、あまり深く考えないようにした。

しかし、裕二は暇を見つけては実夏に会いに来た。

そして実夏に自分の過去や最近の出来事を面白おかしく話して聞かせた。

「毎年自転車で、丹沢まで行くんだよ。大荷物背負って、半日掛けて行くんだ。それでさ、男ばかりで川に浮かべたペットボトル目掛けて石を投げるの。誰がコントロールいいか競うんだよ。ガキだよなあ、俺ら」

裕二の話を知っていると、自分もその場にいるような気持ちになれた。

実夏は嬉しくて仕方がなかった。

実夏が裕二に惹かれていったのは必然だった。

裕二がすべての毎日だった。

誘われそうな時間には、何も予定を入れずにいた。

でもそれが孤独感を強める原因となった。

裕二は春からの数ヶ月間、体を休める為の時間を裂いて実夏と会っていた。

残業で帰宅が次の日にまたがる毎日だったので、体力的に無理をしていた。

実夏との関係が落ち着きを見せ始めた頃、裕二は自分の生活ペースを取り戻そうとした。

そこに悪気は全くなかった。

だが、これまでの日々が当たり前だと思っていた実夏は戸惑いを隠せなかった。

「今度はいつ会える？」

「うーん、忙しいからな」

「土曜日は？ 次の日休みでしょ？ 夜からでもいいから会えない？」

「日曜日も仕事が入る事があるんだよ。突然電話がかかってくるから予定入れられないんだ」

会う度に実夏は裕二に不満をぶつけた。

始めは「ごめん」と謝っていた裕二だったが、だんだん実夏の事が煙たくなってきた。

会う回数が減り、電話もめったに掛かってこなくなった。

実夏から裕二の携帯に電話する事は許されなかった。

仕事に支障が出るから、という理由で裕二が拒んでいた。

連絡が途絶えて一ヶ月たったある日。

実夏は苦しくて辛くて仕方がなく裕二に電話をしてしまった。

電話に出た裕二は不機嫌そうに「時間が出来たらこっちから連絡するから」と、それだけを実夏に告げた。

実夏は電話した事を深く後悔した。

そして裕二のことを諦めようと思った。

バイトの時間を増やし、裕二のことを考えずに済むようにした。

そうして数週間。

ようやく少しだけ気持ちが落ち着いた頃。

その気持ちをわざとかき乱すかのように裕二からの電話があった。

別れを決意していたはずなのに、裕二の声を聞くと何も言えなくなってしまう。

裕二をまた求めてしまう。

そしてまた、ひとり取り残される生活に戻る。その繰り返しが一年近く続いていた。

実夏は点滅しているメッセージランプをじっと見ていた。

恐いのだ。

裕二じゃなかったら、また酷く落ち込む自分が実夏にはわかっていた。

でも裕二であって欲しい、知り合いの中で家の電話に掛けてくるのは裕二くらいしかいないと、期待を抱かずにはられない。

忘れようとする心の片隅で、裕二のことを待ち続ける自分を捨てきれないのだ。

「裕二……」

思考のすべては裕二に向けられていた。

震える手が無意識に再生ボタンに伸びていく。

『一件です』

コンピューターの声が流れる。

実夏は瞬時に電話から顔を背け、耳を両手で覆った。

「……………ツーツーツー」

少しの沈黙の後、電話が切れた。

耳からそっと手を放し、実夏は肩を落とした。

そして、フツと小さく笑った。

しばらくその場に座り込んでいた。

じっと動かず、メッセージランプの消えた電話を見つめている。

実夏は泣いていた。

時計は午前零時を回った。

疲れているはずなのに神経が高ぶり、実夏は眠ることが出来ない。

ピンポン

放心状態の実夏を揺さぶり起こすように、ドアのチャイムが鳴った。

実夏は恐怖に脅えた。真夜中にたずねて来る友達などいない。

実夏がいることを確信しているのか、チャイムは二度三度と鳴らされる。

実夏は息を殺した。

コン コン

壁の向こうの人物は、今度はドアをノックした。

実夏は膝を抱えてうずくまった。

どのくらい時間が経ったのだろうか。

いつの間にかチャイムもノックの音もしなくなった。

実夏は顔を上げ、ドアの方を見た。

そして静かに立ち上がった。

足音を立てないように、そうっとドアに近づく。

「実夏」

その人物は実夏の名を呼んだ。

その声を聞いて、実夏は呆然と立ちすくんだ。

「実夏、いるんだろ」

その人物は落ち着き払った声で言った。

「裕二！」

実夏はとっさにドアのノブに手をかけた。

だが、今まで待たされたまま冷たくあしらわれていたのだ。

実夏にもプライドの欠片というものがあつた。

「帰って……」

実夏はドア越しにそう言って、ボロボロの自分を必死で守ろうとした。

「明日、早い。だから、帰って」

実夏は嘘をついた。

しかし、実夏の強がりなど裕二には通じない。

「開けてくれるまで帰らないよ」

裕二のその言葉に弾かれるように、実夏はまた瞳を潤ませた。

実夏は玄関のドアにもたれかかったまま眠っていた。

うっすらとした陽の光が窓を白く染め、その明るさで実夏は目覚めた。

「寝ちやっただ……」

同時に夕べの事を思い出した。

「裕二……」

実夏の心は夜が明けてもなお、重く沈んでいた。

フラフラと立ち上がり、レンズ越しに外を見た。

そこに裕二の姿はなかった。

「いるわけないか……」

裕二はドアの横の壁にもたれ掛かって座っていた。

実夏からは死角となる位置だった。

実夏はやかんに火をかけた。

お湯が沸くまでの間、ベランダに出る。

そして木の上の僕と対面した。

僕は実夏に伝えたい事があって、何度も鳴いて合図を送った。

裕二がいるよ

玄関のドアを開けて！ 裕二はそこにいるよ！

僕は実夏にそれを伝えようと躍起になった。

だけど実夏は怪訝そうに僕の事を見るだけだった。

カタッ

玄関で物音がした。

実夏はその音のした方を向いた。

が、同じタイミングでお湯が沸いたやかんに注目した。

僕は慌てた。

裕二が帰っちゃうよ！

朝にふさわしくない声で、僕は鳴きわめいた。

「もう、うるさい！」

実夏は僕に向かって一言そう言うと、ベランダの戸をぴしゃりと閉めた。

裕二はドアの隙間にメモを挟むと、アパートの階段を静かに下りていった。

僕はアパートの屋根に止まり、裕二が帰っていく後ろ姿を見ていた。

おまえも男だったら、実夏に優しくしてやれよな。

面と向かって言えないのがしゃくだった。

そして。

実夏が裕二の残したメモに気が付いたのは、裕二が去ってから四時間後のことだった。

学校に行こうと玄関を出た時、ひらっと舞った紙切れに気がついた。

実夏はそれを何気なく拾って、絶句した。

『あと三時間後に仕事に行かなくてはならないので、また来ます』

実夏は裕二の残したメモを両手で握り締めた。

明け方まで裕二がいたことを知り、ドアを開けて裕二を探さなかった事を悔やんだ。

実夏は、裕二をずっと冷たい空気の中に置き去りにした自分を責めた。

いつも実夏の方がぞんざいな扱いをされているというのに……。

三カ月後。

実夏は相変わらず、裕二のいない日々を淡々と過ごしていた。

裕二からは数回の連絡があっただけだ。

その会話の中で、会社の研修で二カ月間三重県の鈴鹿に行く、と言う事を本人から聞いた。

「私も鈴鹿に追いかけて行きたいな」

友人に実夏はそう漏らしていた。

実夏が鈴鹿に行きたい理由は、裕二がいるということ以外にもうひとつあった。

鈴鹿では毎年、鈴鹿サーキットでバイクによる八時間耐久レースが行われる。

その話を裕二がしてくれたことがあった。

「レースをする側はもちろんなんだけど、見ている俺達にとっても八時間耐久なんだよ」

「どうして？」

「炎天下の中、ずっと屋根のないところでみているじゃない。だから暑さとの戦い」

「ああ、そっか」

「まあ、ずっと観覧席に座っているわけじゃないけどね。いろんな関連グッズとかを売ってるテントがあるからそれ見に行ったり、食べ物飲み物買ってまた席に戻ってきて観戦するんだ」

「忙しいねー」

「だってじっとしてると体がじりじりしてくるんだよ」

「日焼けしたい人にはちょうどいいね」

「そういう人もいる。気を付けないと熱中症必至」

「大変だあ」

実夏は裕二の話にどんどん惹き込まれる。

「去年なんかさあ、俺の目の前で転倒してエンジン止まっちゃったバイクがいたんだよ」

「えー、可哀想」

「必死で動かそうとしてるんだけどダメでさ、ホント気の毒だったよ。今日まで入念な調整してきただろうしね」

「うん」

「それでね、八時間終るでしょ？ゴールの瞬間はすごく感動的なんだよ。勝ったライダーがライトをつけてゆっくりウイニングランするんだけど、こっちも戦い終えたっていう爽快感でいっぱいになるんだ」

「いいなあ、私もその雰囲気味わってみたい」

楽しい会話も裕二の笑顔も、今の実夏には簡単に手が届かないものとなっていた。

鈴鹿に行けば、再びそれらに出逢える……と、実夏は微かに期待を抱いていた。

九月のある日、実夏は大学の食堂で友達とお茶を飲んでいて。

別の友達が背中越しに、なにやら騒々しく喋っている。

「良子って鈴鹿行ったんだよねえ、八耐見に」

実夏の体は凍りついた。

良子というのは、裕二が実夏と付き合う半年前まで付き合っていた女の子だ。

実夏と良子は同期生で、実夏と裕二が付き合うまでは割と仲が良かった。

が、別れたにも関わらず裕二と良子が時々会っているという話を耳にしてから、実夏は良子を避けるようになった。

だから実夏にはわかった。

裕二と良子は鈴鹿で逢っている。

実夏は、裕二に誘われもしないのに鈴鹿に行くことなど出来ないと言っていた。

実夏は、パッと後ろを振り返り、良子の名を出した友達の顔を見た。

その友達は実夏と目が合うと、しまった、というような顔をした。

決定的だった。

実夏はその友達の慌て振りを見て確信した。

鈴鹿。

東京から日帰りで行くにはちょっとせわしない所。

裕二には仕事があるので鈴鹿にいらなくてはいけません。

良子が八耐を見てから一人で帰ってくるとなると、ほんの少しの時間しか二人でいられなくなる。

そんなことを裕二が望むだろうか。

お互い自由に、干渉しあうのはやめましょうという良子の提言で二人は別れていた。

だから裕二が良子の事をずっと好きでいてもおかしくはなかった。

実夏との距離を置き始めた頃から、裕二は思い通りにならない良子の方に再び惹かれ始めていたのかもしれない。

実夏はそのことを強く感じていた。

だから思ったのだ。

良子をその日のうちに、東京に帰すはずがないと……。

全身の力が抜けた。

実夏は席を立つと、ふらふらと食堂から出ていった。

ぼんやり霞んだ三日月が実夏の部屋を照らしている。

実夏は三面鏡に映った自分の顔を眺めていた。

泣いてはいなかった。

人は悲しみが抱えきれないほど大きいと涙も出ないのか。

実夏はただただ、深い呼吸を繰り返した。

僕は気が気ではなかった。

実夏から一瞬たりとも目が離せなかった。

実夏は手元にあった口紅をそっと口元に持っていく。

その瞬間、実夏の体はがたがたと震えだした。

様子がおかしい！

僕がそう思った時、ふと実夏の心の声が聞こえてきた。

裕二は私を必要としていない。

私を決して愛してはくれない。

もう裕二はここへは来ない。

裕二とさよならしなくちゃ。

ばいばいって……。

実夏が力無く視線を落としたその先に、キラリと光る物があった。

何を考えてるんだ！

僕は剃刀を手にとった実夏を見て動揺した。

僕は、どうしたらいい？

君は一人じゃない。

僕がここにいる。

君の事を見守り続けてる僕がいるのに！

僕は必死で鳴き続けた。

でもカラスの僕に何が出来る？

そばに行って、傷ついた君の心を癒す事すら出来ない。

君の味方だなんて思い上がりにも程がある。

木の上から見ていることしか出来ないんだから。

実夏は何かに取り付かれたように剃刀を見つめている。

ダメだよ、実夏！

僕は声が枯れるほど叫ぶ。

剃刀の刃が実夏の腕に吸い寄せられていく。

実夏、目を覚まして！

実夏は白い手首に刃先を突き立てた。

僕は無意識に木の上から飛び立った。

窓ガラスに体当たりする。

そして意識を失った。

どの位暗闇にいたのだろう。

照らされた懐中電灯の光で目が覚めた。

実夏が気味の悪そうな顔をして僕を覗き込んでいる。

「死んでるのかな……」

実夏が呟いた。

その問いに答えようと、僕はまだ自由の利かない体を横たえたまま「カー」と一鳴きした。

そして力を振り絞って木の上に飛び立った。

いつまでも黒い大きなカラスがベランダにいたら、気持ちがいい人なんていないから。

「何だったの？」

実夏の声が聞こえた。

僕の事を見上げている。

実夏はしばらく考えていた。

「もしかして、いつも見かけるカラス？」

実夏のいつも見ている情景が目の前にあった。

実夏は三面鏡の前に座り直した。そして無造作に置かれた剃刀を何気なく見た。

死のうとしていた事を思い出したのだろうか。

実夏は深いため息をつき、また僕を見上げた。

「助けてくれたの？」

実夏は僕に訊いた。

僕は「カー」と返事した。

「あ、答えた……」

実夏は少しだけぼかんとした顔になった。

そして言った。

「そうだよね、あんな奴の為に命を粗末にしたらいけないよね」

そうだよ、実夏。

自分を大切にしなくちゃ。

君は君。

裕二の所有物じゃないんだから。

「ありがとね。うん。もう大丈夫。なんだか吹っ切れた。カラスくんのおかげだよ」

そう言いながら実夏は声を出して笑った。

久しぶりの笑顔だった。

それでいい。

君は幸せにならなくちゃいけない人なんだから。

実夏は晴れ晴れとした気持ちで電話の前に立った。

そして、裕二の留守電に「さよなら、裕二」と入れた。

完

## 君は奴の所有物じゃない

<http://p.booklog.jp/book/91160>

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91160>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91160>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ